

# 緑のまきば

2010年 No.43

小金井緑町教会

小金井市緑町四一六一三三

☎042-381-7961

牧師 山畑 謙

説 教

## 『いけにえ』

二〇一〇年度の聖句

山畑 謙

「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」

(ローマ二・二)

創世記の天地創造の記事の中で、「神其像の如くに人を創造たまへり」<sup>そのかたちごと</sup> 即ち神の像の如くに之を創造<sup>つくろ</sup>之を男と女に創造たまへり」(文語訳／一・二七)とあります。「神の像」(ラテン語でイマゴ・デイ *Imago Dei*)の意味するところは、深く広いものでありますが、大切なポイントとして、「人格」をあげることができま。他の被造物にはない、人にだけ与えられているものとして、神から賜った特別な恩恵としての「人格」があります。

「人格」を、辞書でひいて見ると、人柄とか個性・性格、そして道徳的行為の主体としての個人などとして出て来ます。聖書が神のかたちとして示す人格は、応答し合う相手となる存在であるということです。

日本豊話学校の校長をしておられた哲学者の川田殖先生は、次のように言っておられます。「聖書は教訓ではなく、神と人との人格的出会い、神の呼びかけと人間の応答(インタラクション)の記録なのである。」(『今こそ人間教育を』一八八

頁) 応答し合う人格的交流を持つことが出来る相手として、人は造られていると言ってもよいでしょう。

私たちは家族や友人や先生・同僚たちと誠実に応答し合うことができる時に、人としての喜びや生きる幸いを深く味わうものです。しかし、それは思うようにうまくはいきません。心の奥深くにひそむ罪が、わがままや食欲や共栄心などとなって現れ、その応答を妨げ、交わりを断絶させてしまいます。そして孤立し、不安と恐れに捕らわれてしまいます。しかし神からの呼びかけを受けて、私たちは「人」として幸いに生きる道がなお開かれてあることに気付かされます。その入口であり、その道が神との人格的交流の出来事としての「礼拝」であるのです。その故に、聖書の信仰を求めようとする方に、まず礼拝に出席されるようお勧めするのです。

応答、交流は、神の側からの呼びかけにはじまります。そして神から先んじて頂いたものがあります。自ら神に背き、神との交わりを断絶させてきていたにもかかわらず、神は呼びかけ続け、チャンスを与え続けてくださいます。それは聖霊によって十字架の下に導かれ、主の十字架

が自分のためであり、復活された主の永遠の命が、滅ぶべきこの自分にも与えられようとしていることを告げ知らされるものです。

この恵みにどうやって応答していったらよいのが、二〇一〇年度の御言葉です。古い聖書の世界では、礼拝と言えはいけにえの動物が神にささげられることでした。焼いて香ばしい煙りにして、その動物を天の神さまのもとにお献げしていくのです。悔い改めのしるし、感謝のしるしとして。しかし、私たちは「自分の体」を献げよと言われています。献身せよと言われています。これは、私たちの身も心も、私たちの人生全部を献げよと言われているのに等しいものです。これは何も仏門ならぬ基督教に「出家せよ」などと言われているわけではありません。

私たちの人生(全生活)が、神の御前に身をもって立つ礼拝を土台とする家となるようにということです。その家は、きつと傷つき痛んだ人生の旅人がやってきて、休むところとなるでしょう。そこに、新たな人格的出会いと応答とが生まれ、大きな喜びが起こされてくることでしょう。そしてそれを神は喜ばれるのです。